

共同研究「汽水の生活環境史」 概要と経過

安室 知（共同研究代表）

共同研究課題	『汽水の生活環境史』共同研究
(1) 共同研究メンバー	研究代表者：安室 知（神奈川大学日本常民文化研究所） 共同研究者：常光 徹（国立歴史民俗博物館名誉教授） 川島秀一（東北大学） 山本志乃（旅の文化研究所） 松田睦彦（国立歴史民俗博物館）
(2) 共同研究期間	2014年度から2016年度まで（3年間）
(3) 研究目的	<p>日本列島には、大河川の河口部や潟湖・内湖といった沿岸環境の多くは淡水と海水が入り交じる汽水域となる。そこは、従来、低湿なため人が暮らしにくい不毛の地、新田開発などにより克服されるべき悪地として位置づけられてきた。しかし、そうした評価はおもに為政者の側からなされたものにすぎない。また為政者のために残された記録や統計に頼る歴史研究の視点もそれにならうものであったことは言うまでもない。</p> <p>しかし、現実にはそうした地にも人が暮らし、またいっけん悪条件だからこそ独特の民俗文化が形成されてきた。たとえば、淡水魚とともに海水魚が棲息する汽水域ではその生産性の高さを利用する独特な漁撈技術が発達するし、また水の制御がままならないからこそそれに順応したかたちでの低湿地農耕がみられた。さらに、そこは海から河川へまたその反対の荷の積み替えがおこなわれるなど水上交通の要地ともなっており、歴史的には市や宿屋の登場といった都市化への胎動もとれる現象がみられた。</p> <p>本共同研究では、汽水域独特の文化要素を繋ぎ合わせ、日本列島の生活環境史として総合化することで、生活者の視点にたった汽水像を描き、「汽水文化」を提唱することを目的としたい。また、その過程において、非文字資料研究の方法として、生活環境史の手法を開拓することも併せて研究の目的とする。</p>
(4) 活動経過	<p>< 2014年度 ></p> <p>(1) 合同調査 調査地：十三湖周辺地域（青森県） 訪問先：中泊町博物館、弘前市立博物館、太宰治記念館 調査日：8月7-9日 参加者：安室・常光・川島・山本・松田</p> <p>(2) 研究会 ・第1回 日時：12月12日午後 場所：横須賀市博物館 参加者：安室・常光・川島・山本・松田 ・第2回 日時：15年3月10日午後 場所：神奈川大学 参加者：安室・常光・川島・山本・松田</p>

- ・山本：2月10-12日（三重県松坂市・津市）、3月21-22日（宮崎県宮崎市・日向市・門川町）
- ・松田：3月23-25日（佐賀県佐賀市・鹿島市）
- ・安室：3月5-6日（福岡県柳川市）

< 2015 年度 >

(1) 合同調査

調査地：南紀沿岸地域（和歌山県）
訪問先：近畿大学水産研究所大島実験場、太地町立くじらの博物館、南方熊楠記念館
調査日：8月28-30日
参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(2) 研究会

- ・第1回
日時：12月17日午後
場所：國學院大學
参加者：安室・常光・川島・山本・松田
- ・第2回
日時：16年3月28日午後
場所：神奈川大学
参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(3) 個別調査

- ・常光：2月20-24日（高知県高知市・南国市）
- ・川島：3月7-8日（和歌山県那智勝浦町）
- ・山本：3月10-14日（青森県八戸市・宮城県岩沼市）
- ・安室：3月17-20日（徳島県徳島市・香川県高松市）

< 2016 年度 >

(1) 合同調査

調査地：北上川河口域（宮城県）
訪問先：大崎市田尻公民館、熊谷産業ほか
調査日：8月2-4日
参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(2) 研究会

- ・第1回
日時：10月10日午後
場所：神奈川大学
参加者：安室・常光・川島・山本・松田
- ・第2回
日時：17年3月10日午後
場所：神奈川大学
参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(3) 個別調査

- ・常光：9月9-13日（高知県東洋町・徳島県海陽町）
- ・川島：11月16-18日（三重県熊野市）
- ・山本：17年2月23-26日（高知県高知市・東洋町）
- ・松田：9月7-10日（愛媛県越智郡上島町魚島・香川県観音寺市伊吹島）
- ・安室：12月15-18日（鹿児島県鹿児島市・熊本県熊本市）

<p>(5) 研究成果</p>	<p><調査概要></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2014年度合同調査では、津軽地方（北奥地域）における生活文化、および十三湖周辺の汽水文化について民俗学的な調査をおこなった。十三湖では、とくに汽水域でのシジミ漁について聞き取り調査をおこない、また漁業の実際を見学し写真等で記録した。 2. 2015年度合同調査では、紀伊半島の生活文化と漁撈文化について民俗学的な調査をおこなった。とくに太田川下流域においてはシロウオ漁について聞き取り調査をおこない、また大島（串本町）の近畿大学水産研究所ではクロマグロの養殖について実験施設を見学するとともにその技術について調査をおこなった。 3. 2016年度合同調査では、北上川河口域の生活文化と漁撈文化について現地を車にて巡検した。また、北上川河口域に発達するヨシ原の利用、シロウオの漁撈、および汽水域の造船技術について、ヨシ業者・シロウオ漁師・船大工にそれぞれ聞き取り調査をおこなった。 <p><成果物－研究期間内－></p> <ul style="list-style-type: none"> ・安室 知 「ホリのある暮らし－柳川（福岡県）の調査より－」、『非文字資料研究センターニュース・レター』35号、p14-17、(16.1.31) ・川島秀一 「籤で決める漁場」、Bulian Giovanni・中野泰編『日本の小規模漁業－環境・社会文化的な視点から(仮題)』、2017年(出版予定) ・汽水民俗研究会編『民俗学者が歩いて出会った人生のことば－忘れえぬ38の物語－』創元社、pp238、(17.10.10) <p>このほか、個人調査については、共同研究メンバー各自が来年度に出版予定の共同研究報告書において論文として成果公開する予定である。</p> <p>なお、同メンバーでおこなった共同研究「水辺の生活環境史」（2011-2013年度）でも「汽水域」を中心課題にしており、その時の成果はすでに『年報 非文字資料研究』10号（2014.3）において、共同研究メンバーそれぞれが論文・研究ノートを投稿している。</p>
<p>(6) 今後の課題と展望</p>	<p><自己点検・評価>（2016年度研究期間終了時）</p> <p>2017年度中に本共同研究の成果として共同研究報告書を刊行する。共同研究メンバーがそれぞれ個別論文を執筆するとともに、3年間の共同調査における聞き取り資料を報告する。</p> <p>この共同研究報告書をもって、当初研究目的に掲げた「汽水文化」を究明することは十分にはできたとはいえないが、これまであまり注目されることのなかった内湾や河口域・潟湖といった灌水と淡水が入り交じる水域における生活文化や生業技術を「汽水文化」として包括する視点を示し、かつその具体相をさまざまに明らかにした点は評価できると考えている。</p> <p>わずか3年間の調査研究（共同研究「水辺の生活環境史」<2011-2013年度>と合わせても6年間）ではあったが、そうした問題意識を民俗学分野において醸成することができたことは大きな意味があり、今後は何らかのかたちで歴史学や文化人類学・地理学・水産学といった他分野との協業を進め、文理融合の学際的な汽水文化研究をおこなう必要性を感じている。</p>